社会・歴史に関する一考察

井　上　周　八

1　はじめに
2　社会の構造
3　社会の本質
4　マルクスの社会観について
5　社会の運動
6　社会・歴史の発展法則
7　主体的歴史観
8　人類の「前史」から「本史」へ

1　はじめに

経済学はその対象とする社会制度が異なれば，その内容も異なる。資本制社会の経済学は，社会主義社会の経済学とその内容を異にする。経済学は「経世済民」の学であるから，「経世」つまり社会を対象とする。したがって経済学の対象とする社会が異なればその内容も異なるのは当然である。

マルクスは自由競争段階の資本制社会を研究して『資本論』を公刊した。『資本論』でマルクスは「平均利潤」の成立と，「生産価格」について述べている。しかし社会主義社会では，資本家は存在せず，したがって「平均利潤」も「生産価格」も成立しない。このこと一つをとってみても，「社会」と「経済学」が密接な関係にあることは明らかである。

まず社会についての基本的な考察から始めよう。

社会とはどのような内的構成をもっており，その本質は何であり，どのような運動を展開するのであろうか。

人間と社会的富が社会的関係で結合されているのが社会である。これが社会の構造である。そして社会の本質は，それが人間を基本として構成されているが故に，やはり人間と同様に，自主性，創造性，意識性を，その本質としている。

また社会は，その本質にもとづいて自然改造，社会改造，人間改造の三大改造運動を展開する。

2　社会の構造

人間と動物の集団生活，人間の社会と動物の社会をみて，まず気がつくのは人間の生活は社会的富とともに営まれているのに対して，動物の生活は裸の生活，一切の創造物のない生活であるということである。

人間社会は，人間と社会的富という物質が一定の社会的関係で結ばれて成立している。人間も社会的存在としての物質であるし，社会的富も社会的存在としての物質である。そしてこの二つの社会的存在が，それらの結合方式である何らかの社会的関係によって結ばれているのが，人間社会である。

人間は最も発達した物質であり，社会的富も物質である。しかし社会的関係は物質ではない。けれども社会的関係は，人間と富を結合させて社会を構成する内部構造を形成するものであるという点からみて，社会の内部構造の不可欠の条件である。社会的関係がなければ，社会は成立しない。つまり人間社会は，人間と人間が創造した精神的・物質的富という二つの物質が，社会的関係によって結合されて存在しているのである。

社会的富も社会的関係も，人間がつくり出すものである。したがって社会の主要な，中心的要素は人間（人民大衆）である。人間を離れて社会を考えることができないのは自明のことである。人間は社会的富を生産して生活しており，一定の社会的関係を結んで生活している。

社会的富は，大きくわけて，精神的富と物質的富に分けることができる。

精神的富のなかには思想的富，理論的富および文化的富などがある。哲学などは思想的富に属するし，科学・技術的知識や社会科学の諸成果などは理論的富である。また文芸作品，絵画，彫刻，文化的創造物などは文化的富に属する。精神的富の領域は，人間の精神生活の領域の拡大とともに拡大する。

各種の精神的富は，何らかの物質によって表現される。例えば思想的および理論的富は書物として存在するし，絵異は絵の具やキャンバスで表現され，音楽は楽譜によって表現され，楽器によって演奏される。

精神的要求を満足させるのが精神的富であり，物質的欲望を満足させるのが物質的富である。

食物，衣服，住居をはじめとする生活手段や，機械，装置，鉄道，発電所，工場などの生産手段は，いずれも物質的富に属する。社会的富は，それが精神的富であれ，物質的富であれ，いずれも人間が生産したものであり，人間に役立つために生産されたものである。

社会の精神的・物質的富は，人間が自主的に生きるために，目的意識的に人間によって創造されたものである。

例えば農機具について考えてみても，それは人間が大地を耕作して食料や原料などを生産するためのものであり，つまり人間が自然に働きかけて自主的に生きるためのものである。

同じように精神的富である社会科学や自然科学に関する書物の場合も，それは人間が過去歴史的に蓄積した知識が，人間の外部に書物という社会的富として現われたものであり，人間が自主的，創造的に生きることに役立つものである。

しかし，階級社会にあっては，一部の社会的富は階級性を帯び，支配階級の利益のためにのみ役立つ，非人間的な，人間の自主性を破壊する富として生産されている。

現在，この社会的富の階級性は，帝国主義者という階級社会の最後の収奪者によって強めら

れている。

本来，人間のために役立つべき社会的富が，人間の真の利益に反して，人間の幸福を破壊する目的で，絶えず生産されているところに，現代社会の深刻な危機が存在している。

資本主義社会における人間を堕落させ，人間性を冒瀆する奇型的な富の氾濫，とくに核兵器の存在は，その最悪の表現である。

マルクスは商品の使用価値とは人間のなんらかの欲望を満足させる物のもっている性質であるとしている。しかし資本主義社会では人間が正しく，幸福に生きるために役立つ商品だけではなく，人間の間違った欲望，不正な欲望を満足させる生産物も商品として販売されている。これらの，人間が人間らしく生きることを妨げる生産物が価値物として売買され，社会に氾濫している。このような社会は，人類が経過してきた奴隷社会や封建社会と同様に過渡的な社会であり，人類の「前史」である。しかし階級社会から無階級社会に移行し，人類がその「本史」に歩みいるなら，このような生産物は価値物として存在することはできなくなるであろう。なぜなら人類の「本史」とは，搾取と抑圧のない，人間の自主性が実現される社会だからである。

社会的富は人間を離れてはその役割を果たすことはできない。

社会が発展すればするほど，社会的富はいっそう膨大となり，また人間の生産に占める比重は相対的に小さくなる。たとえば生産が機械化されオートメ化されればされるほど，人間の生産で占める比重は小さくなる。だからといって社会的富を社会の主体とみることは勿論できない。社会の主体はあくまでも人間である。

さて社会は人間と社会的富が社会的関係によって結びついて成り立っているのであるが，もし人間と社会的富が，一定の，何らかの社会的関係によって結ばれていないとすれば，人間は勝手気ままに行動し，政治的にも経済的にも混乱を呈し，社会は存在することもできないし維持されないであろう。それゆえ社会を維持し発展させるためには，人間の要求と利害関係を調節し，人間の創造力を有効に行使するための社会的関係を結ばなければならない。ここに社会的関係の役割がある。つまり社会的関係は，社会における人びとの地位と役割を規制することをその基本的役割としているのである。

人びとの社会的地位とは，人びとが社会的にどのような責任ある立場にたち，どのような権限をもち，どのような処遇をうけるかということであり，人びとの社会的役割とは，人びとが社会的にどのような仕事の分担を受け持ち，どのような義務を社会に負っているかということである。人びとの地位を規制する社会的関係は，人びとがその役割を果たすためのものであり，人びとがその地位に応じてその創造力を発揮するためのものである。したがって地位と役割は相互に密接な関連をもち，人びとが地位に応じた役割を果たし，役割に応じた地位を与えられることが理想である。

人類は，周知のようにその初期から何らかの社会的関係のもとで生活を営んできた。

人間と人間が社会的関係で結ばれ，また人間と社会的富も社会的関係のもとで一定の関係を

結んでいる。

これまで人類が経験してきた原始共同社会から社会主義社会までの諸社会は，それぞれの社会的関係の相違によって区別される。

社会的関係の基本は人と人との関係であるが，この社会的関係のもとで人と富も一定の所有関係を結んでいる。人と人との関係と同時に，人と富との関係も極めて重要である。

社会的関係は，種々の社会制度の総体から成り立っている。社会制後には，社会全体の制度という意味もあるが，ここでいう社会制度とは社会のなかの各分野の整備された秩序ある体系のことである。

社会制度の主なものに，政治制度，経済制度，軍事制度，教育制度，治安維持制度，保健医療制度，その他がある。

最も重要な制度は，政治制度と経済制度である。

政治制度は結局は，その社会の政治権力が誰によって所有されているかという，政権を中心とした制度である。

経済制度はその社会の富，とくに生産手段が誰によって所有されているかという，所有権を中心とした制度である。この二つの制度は有権的に結合・統一されている。

階級社会にあっては，政権は人民に対する支配権であり，所有権は富に対する支配権である。

奴隷所有者による奴隷の支配，封建領主による封建農民の支配，資本家による賃金労働者の支配は政権の問題であり，奴隷所有者による奴隷と生産手段の所有，封建領主による土地の封建的所有，資本家による資本としての生産手段の所有などは，いずれも所有権の問題である。

一般に政権の所有者が生産手段の所有者である。

政権と所有権が搾取階級のものか，勤労人民大衆のものかによって，人民の幸・不幸は左右される。勤労人民大衆は，政権と所有権の主人となり，社会の主人となることなくしては，社会の主人として，人間らしく生きることはできない。

しかし，まだ社会の主人となることのできない人びとでも，理想の社会を求めてたたかう人びとは，生きがいのある，幸福な生活をしているといえる。

宮沢賢治は「われらは世界のまことの幸福を求めよう。求道すでに道である」と述べている。

人民政権の社会を実現するためには，人民大衆が正しい思想意識をもつことが何よりも必要である。

どのような社会が，よい社会なのか。それは①人間，②社会的富，③社会的関係のそれぞれがよい社会である。まず人間がよく，社会的富が人間に奉仕するものであり，社会的関係が，人民に幸せを与えるものでなければならない。

社会は人間と社会的富とが，社会的関係によって結ばれて成立しているのであるから，理想の社会は，人間の自主性と創造性が開花発展し，一切の社会的富が人間に真に役立つ富であり，社会的関係が，すべての搾取と抑圧のない，人びとが生死苦楽をともにする関係となっている

秩序ある社会である。

このような理想の社会を実現するためには，私たちは，反帝自主の旗をかかげて，社会主義・共産主義の道を確信をもって前進しなければならない。

3　社会の本質

さて個々の人間は，自主性，創造性，意識性をもっているが故に，他の一切の動物と異なる社会的存在となることができる。そして社会は，個々の人間の自主性，創造性，意識性を統一した存在である。このため，社会は個々の人間の所有する自主性，創造性，意識性よりも，はるかに大きな，質的に優れた自主性，創造性，意識性をもった，この世界でもっとも発達した存在なのである。

社会は自然とは異なる固有の属性をもっている。社会は個人々の自主性，創造性，意識性の母体である。社会が人間の三大属性の母体であるのは，社会が個々人の自主性，創造性，意識性を統一して，社会の本質としているからであり，社会を離れて個人は人間となることができないからである。

人間は生まれながらに，自主性，創造性，意識性をもつことはできない。人間は孤立して生きることができず，社会の一員として生き，活動する過程で社会的属性をもつことができる。人間のもっている社会的属性の母体は社会そのものである。

個々人のもつ人間の自主性は，社会的に統一されて社会の属性となる。

社会の自主性は社会のなかで個々人がもっている自主性と比べると，はるかに大きく優れている。

個々人のもっている自主的要求は，もちろん社会のもっている自主的要求と関係のない自主的要求ではない。社会を構成している個々人の自主的要求を離れて，社会の自主的要求は存在しない。しかし，だからといって個々人の自主的要求と社会の自主的要求は，全く同一であるのではない。

個別的人間がいくら社会に忠実であっても，社会の自主的要求をことごとくもつことはできない。別言すれば社会のなかの個々の人間の自主的要求は，社会の主体である人民大衆の自主的要求のすべてを包含することはできないのである。

このことと関連してさらにいうならば，社会のなかの個人の自主性，創造性，意識性は，社会の主体である人民大衆の自主性，創造性，意識性のすべてを代表することはできない。

ある社会の自主的思な想意識，自主的要求の発展水準は，その社会の発展水準を規定する。

階級社会においては，真の意味における社会全体の統一はなく，支配階級の要求と人民大衆の要求は一致しない。しかし支配階級は彼らの要求と利益を，社会全体の要求と利益であるかのように偽装して，人民大衆にそれを受け入れるように強制する。

真に自主的な社会とは，階級社会ではなく人民が社会の主人となった社会である。このような社会の自主的要求には，この社会を構成しているすべての人びとの自主的要求が含まれている。それゆえこのような社会においてこそ，その社会を構成する個々人の自主性は十分に開花し発展するのである。

社会の要求と利害関係を統一的に調整する機能は政権担当者が遂行する。したがって人民政権を実現した社会主義社会，共産主義社会のもとでのみ，人民大衆の自主的な要求と利益は全面的に擁護され実現されるのである。

次に社会の創造力についてみよう。社会は自主的に生き発展しようとする要求をもっており，かつそれを実現しようとする創造力をもっている。社会の自主的要求と創造力は，社会を構成している人民大衆の自主的要求と創造力である。

社会のもつ創造力は，物質的力と精神的力の統一した創造力である。

社会の創造力は，その創造的活動の対象によって区別される。すなわち自然を改造する運動，社会を改造する運動，および人間自身を改造する運動である。

自然を改造するための創造力のなかで重要な役割を果たすのは，社会の生産力である。

社会的富を生産する社会の生産力は，人間の労働力と生産手段（労働手段と原料などの労働対象）から成り立っている。労働は人間が自然に働きかけて，それを自己の生活に役立つものにするため労働力を行使することである。労働は人間が人間として生存するための第一の基本条件であり，このことは人びとが一年はおろか数カ月でも労働を停止するなら社会は存続することができないことによっても明らかである。

労働力と生産手段は生産力の物質的要因であり，それを目的意識的に行使する人間の意識は生産力の精神的要因である。人間の創造的活動に必要な科学的知識が社会の創造力の精神的要因を形成するとすれば，人間の創造的活動に従事する肉体的力と物質的手段は創造力の物質的要因を形成する。

社会を改造する創造力には，社会改造に必要な科学的知識と人間の肉体的・精神的能力および物質的手段が含まれる。

社会改造に必要な科学的知識は，マルクス主義の創始によって質的に高まった。

社会を改造する原動力は人民大衆である。人民大衆は歴史的に自主性を求めてより高い段階の社会を実現してきた。それぞれの社会を維持し管理するためには政治的力量が必要である。この政治力には，国家・社会制度を維持し管理する人間の能力と物質的手段が含まれる。司法・警察機関および軍隊は政治活動を保障する手段なので政治的力量のなかに含めることができる。

人間を改造する創造力には，人間改造に必要な知識と人的力量，それに物質的手段が含まれる。人間を改造するということは，その肉体を強健にし，その精神生活を豊かにし，人間を思想意識の面で改造することを意味する。肉体の改造分野には，医療・保健や体育などがある。

教育は思想や文化を人々に習得させることにより，彼らを社会的意識をもった人間に育成する。教育は思想や文化を直接生産する仕事ではないが，社会的歴史的に創造されたそれらの成果を人びとに習得させる役創を果たすのである。

教育をはじめとして，医療やその他のすべての人間のための事業を非生産的とみて軽視してはならない。教育は人材を育てる活動であり，すべてのことは人間によって決定されるからである。

人間を改造する創造力には，科学，教育，文学，芸術，医療・保健，体育のすべての分野が含まれている。

次に社会の意識性についてみよう。個別的な人間の行動を目的意識的に調節・統制するところに個々人のもつ意識の最も重要な役割があるように，社会的運動を目的意識的に調節・統制するところに社会的意識の基本的役割がある。社会的意識によって社会は自主的で創造的運動を行なう。

社会的意識は，二つの大きな分野に分けることができる。

一つは社会的集団の自主的要求と利害関係を反映した思想意識としての分野であり，もう一つは社会の自主的要求を実現するための創造力を構成する科学・技術知識としての分野である。前者は自主性を擁護し発展させるための機能を果たす。

思想意識の発達の程度は，その社会の自主性の発達の水準を集中的に表現し，科学技術知識の発達の程度は，その社会の創造性の発達の水準を集中的に表現する。いいかえれば，思想意識が発達すればするほど，社会はますます自主的に運動するようになり，科学技術知識が発達すればするほど，社会はますますます創造的に運動するようになる。社会生活は複雑なので，社会的意識もいろいろの分野にわかれるが，人間の運命開拓で最も重要なのは思想意識と科学技術知識である。

個別的な人間の行動を意識的に調節統制する器官が脳髄であるように，人間の集団である社会の運動を意識的に調節統制する機能を果たすのが政権をもつ政府である。

すべての社会的意識は，みな社会的運動に関与するが，とくに政権の指導思想は，社会的運動において決定的な役割を果たす。

階級社会では，思想意識も階級的に分裂し，対立している。支配階級の思想意識は反動的かつ非人間的である。支配階級は人民大衆への支配抑圧を合理化する思想意識を人民大衆に強制する。これに対して勤労人民大衆は，支配階級との闘争の過程で次第に目覚め，自己の人間としての要求と利益を反映した思想意識をもつようになる。

支配階級を打倒して樹立された社会主義社会になってはじめて，勤労人民大衆の要求と利益を反映した思想意識が，唯一の指導思想として確立されるし，確立されなければならない。

思想意識とともに重要な社会的意識は知識である。これには自然科学，社会科学，人間に関する科学などの広範な領域が含まれている。

社会的意識は，社会的運動の全領域にわたって存在している。また人間生活のあらゆる分野にわたって存在している。すなわち哲学，宗教，道徳，自然科学，社会科学，芸術，文学，そのほかの広範な領域にわたっている。もし社会的意識の全分野を知ろうとするなら，図書館の資料分類表を一覧すればよい。そこにあげられているあらゆる分類項目はすべて社会的意識の内容をなすものである。

社会的意識は社会の自主的創造的活動を規制し裏付ける極めて重要な役割を果たす。

4　マルクスの社会観について

次にマルクスの社会観を批判的に検討してみよう。

マルクスは『経済学批判』の「序言」で彼の社会観を提示している。

マルクスは社会を社会的存在と社会的意識の関係を問題としながら考察している。そして物質・存在と観念・意識との相互関係においては，前者が本源的であり，後者が二次的であるという原理を，社会的存在と社会的意識の関係にもあてはめて考察した。

マルクスは次のように述べている。

「人間はかれらの生活の社会的生産において，一定の必然的な，かれらの意識から独立した諸関係，すなわち，かれらの物質的生産諸力の一定の発展段階に照応する生産諸関係にはいりこむ。これらの生産諸関係の総体は，社会の経済的構造を，すなわち，そのうえに一つの法律的および政治的な上部構造がそびえたち，そしてそれに一定の社会的意識諸形態が照応するところの現実的な基礎を形成する。物質的生活の生産様式は，社会上，政治上および精神上の生活過程一般を条件づける。人間の存在を規定するのはかれらの意識ではなくて，逆に，人間の意識を規定するものがかれらの社会的存在なのである。」(『経済学批判』「序言」)

つまり生産諸関係の総体＝社会の経済的構造が基礎＝土台であり，このうえに社会的意識の諸形態が，土台に照応して成立する，としたのである。

ここに社会とは生産諸関係の総体を基礎にして，そのうえに法律的，政治的な上部構造と一定の意識諸形態をもって成り立っているというマルクスの見解が示されている。

しかし，このように社会的存在が社会的意識を規定するという一面的解釈にとどまるならそれは正しくない。

もし社会的存在が社会的意識を規定するだけであるなら，新しい思想意識はつねに新しい社会制度が樹立されたのちにのみ出現することになる。このような見解に立つなら，新しい社会を実現しようとする思想意識が先に生まれて，この思想意識にもとづいて，社会を変革するために人民大衆が闘争に立上るという歴史的事実を説明することはできない。

社会とは何かを問題とするにあたって，どのような視点に立つかが重要である。大切なのは社会的運動をおこし，推し進める主体は何かという規点から社会をみることである。

社会を生産諸関係の総体とその上部構造とみ，生産諸関係は上部構造を規定する現実的基礎とみる観点は，存在が思惟を規定するという唯物論の命題を社会の本質を理解する問題にあてはめて，社会的存在が社会的意識を規定するという命題にしたものである。この立場は，社会的運動をおこし，社会的運動を推し進める主体が何であるかという見地から問題をみるのではなく，何が意識を決定するかという見地から問題を提起したものである。この問題提起は，観念論的社会観を克服するための重要なステップではあった。しかし，社会的存在が社会的意識を規定するということの解明にのみ止まっていては，人間が意識的に社会自体を変革することを無視することになる。それと同時に，この立場からの，社会とは何かという解答も正しいものとはなり得ない。

社会とは，自主的に生き発展しようとする人民大衆が，その要求を集団として実現しつつある歴史的に形成された生活単位であることは，誰の目にも明らかである。しがたって，人間の本質的特性と世界における人間の地位と役割を正しく規定し，人間，すなわち人民大衆を中心に据えて社会をみてこそ，社会とは何かがはじめて解明されるのである。

5　社会の運動

すべての事物の運動は，その事物のもつ性質によって規定される。自然の運動は，それぞれの自然のもつ性質によって規定され，社会の運動も，社会のもつ性質によって規定される。

社会は人間の集団である。そして世界と自己の運命の主人として生き発展しようとするのは人間の本性的要求である。人間の生活は人間と世界の関係のなかで行なわれているので，人間が世界の主人となるためには，自然の主人となり，社会の主人となり，また自分自身の主人とならなければならない。このために自然改造，社会改造，人間改造という三大改造運動を人民大衆は社会的運動として遂行しなければならない。

すでに述べたように，社会は人間と，人間がつくり出した社会的富が社会的関係によって結びつけられて成り立っている。しかし社会的富は人間によってつくられ，社会的関係も人間がつくるのであるから，社会の基本は社会を構成している人間（人民大衆）であり，人民大衆こそが社会的運動の原因であり，原動力である。

自然の運動と社会の運動の質的な相異は何であろうか。それは社会的運動には，目的意識的に運動を推進する人間，人民大衆という主体があるのに，自然の運動には目的意識的に運動する主体がないという点である。すなわち自然の運動は，自然のもつ性質にもとづいて行なわれ，それはなんら目的意識的な創造的運動ではない。これに対して社会の運動は，社会を構成している人民大衆が社会的意識にもとづいて行う創造的運動である。ただ自然的運動と社会的運動を物質一般の共通性からのみみるのは誤りである。

マルクスは社会的意識と社会的存在との関係を問題とし，社会的意識が社会的存在によって

規定される側面があることを明らかにした。

社会も物質的存在であるという点では，自然と共通性をもっている。しかし，社会は単なる自然とは異なり，自主性，創造性，意識性をその本質としている人間の集団であるという点で，単なる無生命物質とはもちろん，その他の生命物質とも異なる存在である。

社会を構成している人民大衆は，自主的要求を実現するために社会的運動を展開する。すなわち社会的運動の原因は自主的に生き発展しようとする人民大衆の自主的要求である。また社会的運動は人民大衆の創造力によって推進される。すなわち社会的運動の動力，推進力も大民大衆の創造力である。

このように人民大衆は社会的運動の主体である。社会的運動は主体である人民大衆の自主性を実現するための創造的運動である。

ところで社会を構成している諸個人は，それぞれその要求を異にしており，またその能力も異なっているため，彼らの行動を規制し，統一させることはできないという見解がある。たしかに個々人の要求や創造力が人によって違うのは事実である。しかし基本的には，彼らの要求は自主的な要求であり，彼らのもつ力は創造力である。したがって諸個人の自主的要求と創造力を統一する社会的関係のもとでは，諸個人は社会の一員として，社会的運動を展開するのである。

社会が敵対する階級に分裂している情況のもとにあっても，支配階級の要求が，あたかも社会全体の要求であり，人民大衆自身の要求であるかのように偽装され，強制されてきたのである。

しかし社会が真にその力を統一的に発揮するためには，指導者と党と大衆が一つに結合した社会とならねばならない。

社会運動の基本的形態は，自然改造運動，社会改造運動，人間改造運動である。

自主的に生きようとする人間の要求は，自然の主人として，社会の主人として，および自分自身の主人として生きようとする要求である。

人間は自然の主人として生きるために自然改造運動をおこない，社会の主人として生きるために社会改造運動をおこない，古い思想と文化の束縛とから脱して自己の運命の主人として生きるために人間改造運動を展開する。

人類の歴史は，したがって三大改造運動の発展の歴史である。社会の発展とは，自然改造，社会改造，人間改造という三大改造運動の発展にほかならない。

自然改造，社会改造，人間改造は，人民大衆の自主性の実現をめざす活動の主要な構成部分であり，人間生活の基本分野である。そして社会の発展とは三大改造運動の発展にほかならない。それゆえ社会の運動・発展の法刻を明らかにするためには，三大改造運動を正しく理解し，その相互関連を把握することが必要である。

社会的運動は人間の社会生活を通して行われる。それゆえ社会的運動の基本形態は，同時に

社会生活の基本分野である。人間の社会生活は，本質において自然と社会と人間自身を改造する生活である。

自然改造は主として経済生活に結びつき，社会改造は主として政治生活に結びつく。また人間改造は，思想的・文化的な面で人間をより有力な存在に改造することなので，文化生活の分野に属する。文化生活の分野には，教育事業をはじめとして保健医療や体育の分野も含まれる。

このように自然改造・社会改造・人間改造と経済生活・政治生活・文化生活は，本質上極めて近い内容を意味している。それゆえ，全く同じカテゴリーではないが，同一カテゴリーとしてみることもできるのである。

まず自然改造運動について考えよう。

自然改造運動は，自然の主人として生きようとする人民大衆の社会的運動である。そのためには，まず，人間の生存と発展を保障する生活手段である物質的富を創造しなければならない。またこの生活手段を生産するために必要な生産手段を生産しなければならない。

すべての生産物は人間自身が消費するための物である。そのためには生産物の分配，交換，消費などの流通面での活動全般が生産活動と結びついて行なわれなければならない。

人間が生き発展するためには，まず食わねばならず，着なければならず，住まわなければならない。つまり生活手段を生産しなければならない。人間に生活手段を提供できる唯一の源泉は，自然である。

自然は人間の労働対象であり，また農林水産業にあっては，自然は労働対象であると同時に労働手段でもある。人間は自然に働きかけ，自己に必要な生産手段と生活手段を生産して生活する。まさに「自然は富の母であり，労働はその父」である。

自然改造運動の基本的分野として重要な位置を占めるのは社会的富の生産であり，社会的富の生産で決定的役割を果たすのは社会の生産力である。生産は労働力が生産手段（機械や装置などの労働手段と原料などの労働対象）を使用して行なうのであるから，生産力の向上は，労働力と生産手段の質を高めることである。

生産力の構成要素のなかで基本的要素は労働力である。労働手段や労働対象は労働力の働きかけがなければ何の役割も果すことができない。それゆえ生産力を発展させるためには人間をまず発展させなければならない。

自然改造を行ない経済を発展させるためには，国内の労働力を動員すると同時に，技術を高め，資源を最大限に利用すべきである。

資源を利用するためには，その国の天然資源を調査し，それを合理的に利用する研究活動を強化しなければならない。

地下資源，水力資源，山林資源，水産資源を効果的に開発利用することは，自然改造運動の発展にとって不可欠の要因である。

さらに穀物生産の増加率を人口増加率以上に高めるために営農方法を改善すると同時に，耕

地面積の拡大という自然改造を行なわなければならない。

社会の発展につれれ，自然改造運動は，量的にも質的にも急速に発展する。

自然は，社会発展のための無限の物質的宝庫である。人間社会の発展は，社会が自然をその要求にしたがって改造し，自然の力を社会の力に転化する過程である。

社会は自然と不可分に結びついておりながら，また同時に対立している。

この自然と社会の対立的矛盾は社会的運動によって解決され，社会は発展する。

自然改造運動の原因と原動力，すなわち自然を改造しようとする要求とそれを推進する力は，社会的人間，人民大衆である。

人間が社会を構成し，自然の主人となるために，自主的，創造的，意識的に生きかつ発展しようと要求するからこそ，社会と自然との矛盾を解決するための闘争がおこり，その結果人間社会に奉仕する自然の役割は拡大するのである。

自然改造なくしては，社会改造も人間改造もありえない。自然改造は社会改造と人間改造の物質的基礎である。

自然の主人として生きるためには，人間社会と自然との調和と統一を拡大強化し，社会と自然が共生共栄しなければならない。それゆえ人間は自然の生態系（エコロジー）を破壊してはならない。

古代の哲学者は自然が火・水・土・空気などの「四元」から成り立っていると考えた。しかし現代の産業社会はこの「四元」を破壊し，「大気汚染」，「水質汚濁」，「地盤沈下」，「日照権の不足」という公害を惹起している。自然破壊は，実は人間破壊にほかならない。

次に社会改造運動であるが，社会の主人として自主的に生きるためには，人間は社会改造運動を行なわなければならない。

人間は自然を離れて生きることができないように，社会を離れても生きることができない。それゆえ，社会の進歩と繁栄に人間は深い関心をもたざるを得ない。

社会に対する献身的な愛が心の底から湧き出るのは，人びとが社会を自己の真の生命の母体とみるときである。

私たちが理想とする社会は，勤労人民大衆が社会の主人となり，すべての人が一つの家庭のように仲むつまじく団結し，協力し，苦楽を共にして暮らす共産主義社会である。

しかし理想の社会は，おのずから実現されるものではない。

歴史を過去にさかのぼればさかのぼるほど，人間の自主性，創造性，意識性は低かった。過去，勤労人民はどのような社会をつくればよいかというととについての理解を，長い間もつことはできなかった。しかし1840年代以降，マルクス主義の創始により，プロレタリア革命と社会主義・共産主義の必然性が論証され，社会発展の法則が解明された結果，搾取と抑圧のない新社会を建設できる展望を人類はもつことができるようになったのである。

そして1920年代以降，主体（チュチェ）思想の創始により，人類は社会を人間の本性にかな

うように変革し，勤労人民大衆が社会の主人としての地位を占め，役割を果たすことのできる社会，社会主義・共産主義の建設についての，より確固とした展望をもつことができる段階に到達したのである。

さて社会改造運動のなかで主要な部分を占めるのは社会的関係の改造である。社会的関係は，人と人との関係を基本とするものであり，したがって，社会的関係を改造し管理する仕事は，とりもなおさず社会における人間の地位と役割を調整する仕事であり，結局は政治の分野に属する。

政治は本質上，社会における人びとの地位と役割を統一的に調節，統制する活動である。それゆえ理想社会を建設するためには，何よりも人民大衆の政治思想を高め，人民が国家と社会を管理，運営する活動に積極的に参加して，社会の主人としての地位と役割を全うできるようにしなければならない。

社会改造によって，勤労人民が社会の主人となった時，人びとは社会の運命を自己の運命とみなし，社会の物質的・文化的富を自己の富とみなし，社会が体現しているすべての美しいものを自己のものとみなすようになる。

しかし社会の全構成員がみな社会の主人となり，社会と運命をともにし，社会のために献身的に奮闘することにこのうえない喜びと生きがいを感ずるような社会を実現するのは容易なことではない。

人びとの頭のなかに旧い誤った思想意識が残っており，社会の内部に統一を妨げる反社会的要素が残っている限り，理想社会の実現は困難である。

次に人間改造運動であるが，人間は自主的に生き発展しようとする。自主的に生き発展するためには，この世界における人間の地位と役割を高めなくてはならない。このため自然改造，社会改造，人間改造を成功させなければならないが，この三大改造運動において最も重要なのは，やはり人間改造運動である。

人間改造とは，人間をより有力な存在に育成することである。自然を改造するのも人間であり，社会改造するのも人間であるから，人間をより有力な存在に改造しなければ，自然改造や社会改造も成功裏に行なうことはできない。人間はより自主的に，より創造的に生きるためには，人間自身をより高い水準に改造し，自己の運命の主人とならねばならない。

人間改造において第一義的重要性をもつのは思想革命であり，自主的な思想意識の確立である。人間は自主的な思想意識を身につけてこそ自分自身の主人となり，自然と社会の主人になることができる。自主的な思想意識は，自己の根本的要求と利害関係を反映した思想意識である。人間の価値はなによりもその人のもっている自主的な思想意識の水準によって規定される。

自主的な思想意識はどうすれば身につけることができるのであろうか。

まず第一にあげられるのは教育である。教育は人間改造のための事業である。教育には人間の自主的な思想意識を培う自主性教育と，人間の創造的能力を培う創造性教育，および体力を

育成する体育教育がある。

もともと人間は，自然と社会を改造する実践のなかで，その自主的な思想意識と創造的能力を身につけるのであるが，しかし思想的文化的遺産や科学的智識が膨大である昨今の情況下では，実践の過程からだけではそれらを体得することは困難である。それゆえ専門の教育機関によって集中的に，短期間で学習することが必要である。ただしこの場合でも教育を実践と結びつけ，実践から遊離しない配慮が必要であることはいうまでもない。

自主的な思想意識は，人間の自主性を実現し，社会に寄与し，貢献しようとする思想意識であるが，私たちは自主的思想思識を堅持し，自己の信念としなければならない。

自主的思想意識を信念化するための思想教育には，したがって人びとの感情を奮い起こす歴史的事実，革命伝統の事蹟と結びついた教育を含めなくてはならない。思想教育において革命的な文学・芸術作品は強力な教材である。これらの教材は生きた人間の生活と感情を生き生きと描き，人びとに真の人間生活がどのようなものであるかを認識させ，さらにそこでの生活感情までも感得させて，人びとを励ますのである。

人間を改造する活動は一定の社会体制のなかでなされる。階級社会における人間改造運動は，支配階級が政治権力と経済力を支配しているため，非常に立遅れている。しかし人民政権のもとでは，全社会的な真の人間改造運動の展開が可能となる。

自然改造，社会改造，人間改造は，そのうちの一つのものが他のものにとって代わることはできない独自の分野を担当するものであるが，それはまた，互に依存し，深い関連をもっている。

自然改造をつうじて物質的生活条件を確保しなければ，社会的改造も成功裏に推し進めることはできない。また社会改造を立派に行なって，人間生活の社会的条件をととのえなければ，自然改造も人間改造も，まともに行なうことはできず，さらに人間改造を立派に行なって，人間自体を育成し発展させなければ，自然改造も社会改造も成功裏に推進することができない。

しかし三大改造運動のうちのある一つのものから他のものが派生するとか，ある一つのものに他のものが帰結されるとみることはできない。生産力が発展しているからといって社会制度が優れている**とは**限らず，社会制度が優れているからといって生産力が発展しているとは限らない。また自然改造と社会改造が進んでいるからといって，人間改造が高度な水準に達しているともいえない。

では社会の発展過程のなかで，三大改造運動はどのようなつながりをもっているのであろうか。

人間は，歴史的にはまず物質的生活手段を獲得しなければならなかった。つまり自然改造から出発せざるを得なかった。

自然改造が発展し生活手段が豊かになるにつれて人口も増加し，人間を改造するための物質的条件もととのってくる。また自然改造と人間改造の発展の結果として社会関係を改造する運

動も提起される。

勤労人民が社会の主人となり，三大改造運動が均衡を保って発展するのが望ましい。

三つの改造運動が均衡的，統一的に発展しているならば，そのうちのどれを出発点にしてもよいであろう。しかし三つの改造運動が不均衡な場合には，まず人間改造運動を出発点にすべきである。

6　社会・歴史の発展法則

社会・歴史の発展法則を解明し，社会主義共産主義への途へと前進する労働者階級の歴史的任務を明らかにしたのは，マルクスの偉大な功績であった。

マルクスは『経済学批判』の「序言」で次のように述べている。

「私の到達した総括的結論は，いったん獲得されてからは私のもろもろの研究のためのみちびきの糸となったのであるが，それは簡単につぎのように定式化することができる。……社会の物質的生産諸力は，その発展のある特定段階において，それらが従来その内部で運動してきたところの現存の生産諸関係と，またはそれらの法律的表現にすぎないところの所有関係と，矛盾するようになる。これらの諸関係は，生産諸力の発展形態からその桎梏に急変する。すると社会革命の一時期がはじまる。経済的基盤の変化にともなって，巨大な上部構造全体が，徐々に，または急激に変革される。このような変革を考察するさいには，経済的な生産諸条件における自然科学的に正確に確認される物質的変革と，人間がこの衝突を意識して，これを克服するところの，法律的，政治的，宗教的，芸術的または哲学的な，要するにイデオロギー的な諸形態とが，いつも区別されなければならない。ある個人が自分をどう考えているかにしたがって，その個人がなんであるかを判断しないのと同じように，このような変革時代をその時代の意識から判断することはできない。むしろこの意識を物質的生活の諸矛盾から，社会的な生産諸力と生産諸関係とのあいだに現存する衝突から説明しなければならない。ある社会構成は，発展の余地ある生産諸力がすべて発展しきらないうちは，決して没落するものではなく，また新しい，より高度の生産諸関係は，それらの物質的な実存諸条件が旧社会自体の胎内でふ化しおわるまでは，決して交代して現れるものではない。だから，人間はつねに自分の解決できる諸課題だけを自分に課するのである。……

大づかみにいって，経済的社会構成体のあいつぐ諸時代として，アジア的・古代的・封建的・ブルジョア的の諸生産様式をあげることができる。ブルジョア的生産関係は，社会的生産過程の最後の敵対的な形態である。ここに敵対的というのは，個人的敵対の意味ではなく，諸個人の社会的生活条件からうまれてくる敵対の意味である。しかし，ブルジョア社会の胎内で発展してくる生産力は，同時にこの敵対を解決するための物質的諸条件をつくりだす。だから，この社会構成体がおわるとともに人間社会の前史がおわるのである。」

マルクスは以上の叙述で，社会構成体のあいつぐ諸時代としての四つの生産様式をあげている。

生産様式は，生産力と生産関係の統一物である。生産力は，生産における人と自然との関係であり，人間が自然に働きかけて財貨を生産する力量を示す概念である。これに対し，生産関係とは，生産における人と人との関係である。この生産力と生産関係の統一物が生産様式であり，この生産様式の差異が，原始共同社会，奴隷制社会，封建社会，資本制社会，社会主義社会などの差異を規定する，とマルクスはみたのである。

マルクスが史的唯物論を確立し，社会発展の法則を解明する以前には，自然について唯物論的にみることのできた人たちも，社会については唯物論的にみることができなかった。

そして社会の発展に何らかの法則を見出したとしても，それらは観念的，非科学的見解にすぎなかった。

よく知られているように，ヘーゲルは「世界史は，自由の精神という意識の展開過程，ならびに，この意識によってもたらされる現実化の展開過程」(『歴史哲学』) であると述べており，また「世界史とは，……精神の発展行程であり，精神の現実的生成であるということ，……過去に起こった事，そして日々に起こる事象のすべてが，神なしにはありえないどころか，本質的に神御自身の御業であるということ，この洞察のみが，はじめて能く精神を世界史ならびに現実界と宥和せしめるのである」と述べている。

マルクスはこのような観念論を社会・歴史の研究分野から追放して，労働者がどのような社会をつくれば，自己の階級だけでなく，全人類を解放することができるかを，明らかにしたのである。

マルクス主義の創始によって，社会科学は質的な発展をとげ，労働者階級の社会改造運動はその理論的基礎を与えられて質的な変化をみせるにいたった。すなわち，人類は，目的意識的に，理想社会を建設するための闘争を開始するようになったのである。

金正日書記は次のように述べている。

「マルクスはドイツの古典哲学，イギリスの古典経済学，フランスの空想的社会主義学説など，当代における先進的思想・理論の批判的な検討と資本主義社会の矛盾の分析にもとづいて，弁証法的および歴史的唯物論の原理を明らかにし，剰余価値学説を提示し，資本主義滅亡の不可避性と共産主義勝利の必然性を論証して社会主義を空想から科学に変えた。

マルクスの卓抜な功績によって労働者階級は，はじめて，科学的世界観をもって社会発展の法則を把握し，階級的解放の実現と明るい新社会建設の前途を見通すようになった。(「マルクス・レーニン主義とチュチェ思想の旗を高くかかげて進もう」1983年5月2日)

社会発展の法則についてのマルクスの『経済学批判』の「序言」における叙述を，私たちは表面的に理解するという誤りをおかしてはならない。

マルクスは生産力と生産関係の矛盾によって，社会革命の一時期がはじまる，と述べている。

しかしこのことを生産力と生産関係の矛盾によって社会が発展する，と理解してはならない。矛盾は事物の発展の前提条件ではあるが，矛盾それ自体が発展の原動力であり推進力であることを意味しない。矛盾とは事物の内部に矛盾した関係があるということであって，この矛盾した関係にある対立物が，事物を発展させるのである。たとえば人間と自然との関係をみると，そこには矛盾が存在する。だからといって，それだけで人間と自然の矛盾が解決されるものではない。人間と自然との間の矛盾を解決するのは，この矛盾を自覚した人間の自然改造運動である。

生産力と生産関係の矛盾を解決するのも，同様に人間の社会改造運動，勤動人民大衆の社会改造運動である。

このように，人間（人民大衆）が社会改造の主体である。マルクスの「序言」でも次のように述べられている。

「このような変革を考察するさいには，経済的な生産諸条件における自然科学的に正確に確認された物質的変革と，人間がこの衝突を意識して，これを克服するところの……」。

つまり，ここでマルクスは人間が衝突を意識して，これを克服するために，社会改造運動をする，と指摘しているのである。

まだ記録に残る歴史の以前に存在した原始共同体について，ほとんど知られていなかった1848年に発表された『共産党宣言』で，マルクスとエンゲルスは「これまでの社会の歴史は階級闘争の歴史である」と述べている。すなわち生産力と生産関係の矛盾を解決するのは，この矛盾のなかに生き，自主性を求めて支配階級に反抗して闘う勤労人民大衆である。したがって「序言」のなかで「これらの諸関係は，生産諸力の発展形態からその桎梏に急変する。すると社会革命の一時期がはじまる」という叙述は，マルクスの階級闘争説と結びつけて理解されなければならないのである。社会革命の一時期が階級闘争によってはじまるのである。

しかし，マルクスは「序言」では，社会の発展を「経済的な生産諸条件における自然科学的に正確に確認される物質的変革を」重視して「社会的な生産諸力と生産諸関係のあいだに現存する衝突」を説明しているため，階級闘争については言及していないのである。けれども自然の発展には意識的な活動主体はないけれども，社会の運動には意識的に活動する主体があるのだから，社会の歴史を自然史のようにみることはできない。

社会発展の原因，原動力は，発展を志向する主体，すなわち勤労人民である。人民大衆が社会と歴史の主体であり，人類の歴史は，自主性をめざす人民大衆の闘争の歴史である。

しかし自主性をめざす人民大衆の闘争も，マルクス主義の出現以前と，それ以後とでは質的に変化したことを見落すことはできない。

資本主義社会が成立し，賃金労働者階級が生まれ，マルクス主義が創始される以前の勤労人民大衆は，生産力と生産関係の矛盾のなかで苦しみ，ただより幸せになり，自由になり，自主性を一段と高めようとして闘争したのであり，彼らの階級闘争が歴史を前進させたのではある

が，しかし彼らはどのような社会を建設すればみずからを真に解放し，自主的に生きることができるかについては知らなかったのであり，またそのような社会を実現するための政治力や軍事力も所有していなかったのであり，彼らの思考意識も未熟であり，かつまた客観諸条件も準備されていなかったのである。

原始共同社会から資本主義社会にいたるまでの歴史の発展は，人民大衆の自主性をめざす創造的運動の歴史ではあったが，しかしマルクス主義の創始以前の人民大衆の闘争は，ただ当面の支配者，抑圧者からの解放を求める闘争であり，目的意識的な新社会建設のための闘争ではなかったのである。

しかし社会発展の法則が解明され，資本主義社会の研究によって社会主義共産主義社会の必然性が明らかにされた結果，人類は目的意識的に理想社会を目指して闘争することが可能となたっ。

まさにマルクス主義の創始によって労働者階級は，歴史上はじめて科学的世界観にもとづいて新社会の建設をめざして階級闘争を展開することができるようになったのであり，マルクス主義の創始によって人類の社会改造運動はそれまでの限界をのりこえて質的転換をとげるにいたったのである。そしてこのような質的に高い段階での革命闘争をマルクスとエンゲルスは，彼らの生涯において実践したのである。

マルクスとエンゲルスが1845～6年にかけて『ドイツ・イデオロギー』を書いた当時，労働者はほとんど例外なく，彼らの歴史的役割についての自覚が欠けていることをよく知っていた。そこでマルクスは彼の認識と革命的理論を革命的実践に変える使命をもつ労働者のあいだにひろめたいと思い，そのための活動を開始した。

1854年にイギリスのチャーティストの代表者たちがマンチェスターに集まったとき，マルクスは挨拶の手紙のなかで次のように述べている。

「労働者階級は自然を征服した。いまや彼らは人間を征服しなければならない。この企てに成功するために，彼らは力ではなくて，共同の力の組織，全国的規模にわたる労働者階級の組織を必要とする。」

そして1847年以来，「決戦の日にプロレタリアートが勝利できる力をもつためには，特別な党を，他のすべてから分離しそれらに対立して，自覚をもった階級政党をつくる必要がある」と主張しつづけてきた。

このようにマルクスは歴史上はじめて，労働者の組織化と党の建設によって新社会の実現をめざしたのである。

マルクスの唯物史観の理解にあたって，次の点についても正しく認識する必要がある。

マルクスはさきの「序言」で，「ある社会構成は，発展の余地ある生産諸力がすべ発展しきらないうちは，決して没落するものではない」と述べていた。

しかし社会主義社会を実現した各国をみるとき，生産力の発展が不十分な諸国のなかから社

会主義国が出現しており，発達した資本主義諸国は，いまだに社会主義へ移行していない。このような現実に対する解答として，資本主義的発展とその矛盾の解決を一国単位でみるのではなく，世界資本主義の矛盾の見地からみなければならないという解釈がある。すなわちロシヤの革命についていえば，帝政ロシヤは資本主義の発展においては不十分であったが，世界資本主義の矛盾がロシヤという資本主義の鎖の最も弱い一環で爆発した，というのである。

しかしマルクスのさきの叙述をそのままにうけとるなら，資本主義の後進国からではなく，生産力の高い先進国から革命が起らなければならないであろう。

ではマルクスのこの叙述をどのように私たちは理解すべきだろうか。

マルクスのさきの叙述における規定は，人類がまだ社会発展の法則や資本主義が社会主義へ移行せざるを得ない必然性が解明されていなかった当時，したがって目的意識的に新社会を建設するという思想・知識と，それを実現する主体としての賃金労働者階級の出現以前の段階である当時においては妥当な規定だったのである。そのような歴史の段階では，それらの社会は生産力が発展しきらないうちは没落して次の社会へ移行しなかったのであり，社会は生産力と生産関係の矛盾の激化のなかで立上った人民大衆の闘争によって，一歩進んだ次の社会に移行したのである。

しかし，マルクス主義の出現以後は，自覚した人民大衆が党と指導者のまわりに結集して，社会革命を行なうことが可能になったのである。

このことは，社会発展の原動力，推進力が，いつの時代でも自主性のためにたたかう人民大衆ではあるが，しかし目的意識的に理想とする社会，つまり社会主義・共産主義社会の建設が可能となったのは社会主義革命を労働者階級がめざし，人類の「前史」に終止符を打ち，人類の「本史」を迎えようとする時代になってからであることを意味する。1917年のロシヤにおける10月社会主義革命の勝利は，人類が理想社会実現に向って歩みだした最初の第一歩であり，各国の労働者に多大の影響を与えたのである。

第二次世界大戦後の朝鮮や中国をはじめとする社会主義社会の実現も同様である。

マルクスは『経済学批判』の「序言」で，歴史発展の自然科学的正確さで，生産力と生産関係の矛盾の激化によって社会革命の一時期がはじまることを明らかにし，また『共産党宣言』で人類の歴史は階級闘争の歴史であると指摘し，社会主義・共産主義の実現によって人間の解放が実現することを明らかにした。

マルクスは人間の解放を究極の課題としていた。1844年に，若きマルクスは「人間が人間にとって最高の存在である。したがって人間がいやしめられ，隷属させられ，見すてられ，軽蔑された存在にしておくようないっさいの諸関係をくつがえさなければならない」と『ヘーゲル法哲学批判・序説』のなかで述べている。

マルクス主義の創始によって労働者階級は，はじめて，科学的世界観をもつことになり，社会発展の法則と無階級社会実現の方途を知ることができたのである。

7　主体的歴史観

マルクス主義の歴史観を継承し，かつ発展させたのは「チュチェ史観」である。

金日成主席は次のように述べている。

「勤労人民大衆は歴史の主体であり，社会発展の原動力であります。人類の歴史は自主性のための勤労人民大衆の闘争の歴史であり人民大衆の創造的活動によって歴史が発展し，社会運動が進められます。」(「人民政権をいっそう強化しよう」1977年12月15日)

また金正日書記は次のように述べている。

「自然と社会の改造をめざす人民大衆の闘争によって歴史は発展します。歴史が発展するというのは，すなわち歴史の主体としての人民大衆の地位と役割が強まることを意味します。」(「チュチェ思想について」1982年3月31日)

ここで述べられているように，歴史の主体は勤労人民大衆であり，人類の歴史は，自主性をめざす勤労人民大衆の闘争の歴史であり，人民大衆の創造的活動によって歴史は発展する。また歴史の発展とは人間の自主性と創造性の発展の歴史があり，世界における人間の地位と役割の発展の歴史である。

金正日書記は前出の「チュチェ思想について」のなかで「チュチェ思想によって明らかにされた社会・歴史原理は，新しい社会・歴史観，チュチェ史観であります」と述べ，チュチェ史観の基本原理を次の4点にまとめている。

① 人民大衆は社会・歴史の主体である。

② 人類の歴史は人民大衆の自主性をめざす闘争の歴史である。

③ 社会的・歴史的運動は人民大衆の創造的運動である。

④ 革命闘争において決定的役割を果たすのは，人民大衆の自主的な思想意識である。

歴史の主体は勤労人民大衆であるという命題は，チュチェ史観の第1の原理である。これにより，チュチェ史観は，自然の運動と区別される社会的運動の基本的な特徴を明らかにした。

自然の運動には，その運動を展開する意識的な主体はない。自然の運動は客観的に存在する自然（物質）のもっている性質によって，文字通り，自然発生的に生じる。これに対して社会の運動は，勤労人民大衆の主体的，主動的活動である。すなわち人民大衆が歴史の推進者である，革命と建設の主人であり，自然を改造し，社会を変革する決定的要因である。

チュチェ史観の第2の原理は，人類の歴史は人民大衆の自主性をめざす闘争の歴史だということである。

人民大衆はあらゆる束縛と隷属から脱却して自主的に生き，発展しようとする。しかし人民大衆の自主性を妨げる障害は，自然にもあり，社会にもあり，人間自身にもある。それゆえ人間は，間断なく自然の脅威とたたかい，自然を利用して生きてきたのであり，また社会の不合

理な抑圧に反抗して闘争し，社会改造をおこない，人間自身を発達させ，より有力な存在に高める努力を続けてきたのである。

とくに社会を改造する闘争は，現在，人民大衆が階級的および民族的隷属から脱して，自主的に生きるための闘争として，世界的に展開されている。そして自主性をめざす人民大衆の闘争は，いまや社会主義・共産主義社会を目的意識的に実現しようとする闘争として，過去のいずれも時代よりも高い段階に到達している。

現在，世界的に展開されている民族の解放闘争や階級闘争，帝国主義に反対し，核兵器に反対する闘争は，すべて人びとが自主的に生きようとするための闘争である。

社会と歴史の発展程度をはかる根本的尺度は人民大衆の自主性がどの程度実現されているか，ということである。あくまでも人間を中心にして社会と歴史の発展をみなければならない。

チュチェ史観の第3の原理は，社会的歴史的運動が，人民大衆の創造的運動だということである。

社会的・歴史的運動が創造的運動だということは，この運動の主体である人民大衆が創造性をもっているからである。

人類の歴史が始まって以来，人民大衆は創造的活動によって自然に働きかけ，その生存と発展に必要な生活資料を獲得し，自然改造運動を展開し，また社会制度を変革する創造的活動によって，よりよい社会を実現してきた。まさにこのように，人類の歴史は，人民大衆の創造的運動の発展の歴史である。

チュチェ史観の第4の原理は，人民大衆の思想意識が革命闘争において決定的役割を果たすということである。

およそ人間の自主的で創造的活動は，意識的に行なわれるのであるが，この意識のなかで，最も重要なのは人間がみずからの運命を自己の力で切り開き，自らの運命の主人となろうとする自主的な思想意識である。

チュチェ史観の4つの原理は，社会的・歴史的運動の本質，その推進力についての新しい，輝かしい解明である。

8　人類の「前史」から「本史」へ

現在，人類はマルクスが『経済学批判』の「序言」で述べている「前史」から「本史」への過渡期にあるといえよう。この地球上から，帝国主義，植民地主義，人種差別などの反動勢力が一掃され，搾取と抑圧から勤労人民大衆が完全に解放され，人間の自主性が全面的に実現される時代の到来は決して夢ではなく，現実となるであろうことは，多くの先覚者の指摘するところである。

今日までに人類が経験してきた，自主性をめざす社会の発展史を簡単に概観しよう。

歴史の発展過程は，それぞれの民族や国家の相違によって，さまざまであるが，しかし各民族，各国家が，どのような特色をもち，複雑な過程をたどってきたとしても，地球上の民族や国家，社会の発展は，大きな潮流として，一つの発展法則がみられた。原始共同社会，奴隷社会，封建社会，資本主義社会，社会主義社会の流れがそれであり，この五つの社会形態を，人類は時代的な経過順序で，この地球上の各地に出現させてきたのである。ただしこの五つの社会形態を，ある一つの社会が単線的に実現してきたものでないことは歴史的事実の示す通りである。

この五つの社会形態の発展史は，一言でいえば，人民大衆の自主性と創造性と意識性の発展史である，といえよう。

原始共同社会の前段階として，私たちは原始人群の時代があったことを知っている。

動物の群から直接に発生した人びとの最初の結合形態は「原始人群」である。この時期は，人間が動物的本能から次第に脱皮して，社会的な要素と生物的な要素との闘争において，社会的・人間的要素をすこしずつ発展させてきた時期であった。いいかえれば，人間社会が動物の群から脱出して，形成されつつある時期であった。

原始人群は，長い期間を経て，やがて徐々に血縁を基礎としながらも，次第に地縁的要素を加味し，狭隘な血縁的つながりを越えて，氏族的原始共同社会へと移行したのである。

原始共同社会は，原始人群よりは，やや進んだ社会ではあったが，しかし，自然に対する改造能力や思想・文化水準は極めて低い社会であり，もちろん三大改造運動も存在せず，ただ自然改造運動とそれにともなう人間改造運動が，非常に緩慢な発展テンポで進行していた。当時の人びとは生きるのに精いっぱいだったのである。しかしそうした生活のなかでも人間の自然へ働きかける能力は，次第に向上し，やがて自分たちの生活に必要な生産物（必要生産物）と必要生産物以上に，余分な生産物剰余生産物を生産するようになった。

剰余生産物が生産されるようになるにつれて，すこしずつ共同体員の個人的能力の差も目立つようになった。また個別的，家族的に生活資料を獲得する条件も生まれ，やがて原始共同社会で行なわれてきた，必要に応じての平等の分配ではなく，能力に応じた，役割による分配がなされるようになった。

必要に応ずる平等の分配に反対し，役割に応ずる分配を要求し，その先頭に立ったのは，比較的に自主性と創造性の強い人であったとみられる。

役割に応じた分配が実施されるようになると，分配された物の個人的所有も認められるようになり，こうして貧富の差が発生する。やがて富者は貧しい人びとを従属させて，搾取するのを当然と考えるようになり，ここに搾取者と被搾取者という階級が発生し，地球の一部に奴隷制社会が発生した。

奴隷制社会の出現の物質的前提条件は，剰余生産物の生産であるが，これは奴隷制社会発生の原因では，決してない。奴隷制社会発生の原因は，あくまでも，当時の人間の思想意識水準

の低さにある。このことは，今日，人類が，剰余生産物を公平に分配するより高い水準の社会主義から，さらに高度の共産主義を志向していることをみても明らかである。ただ生産力の発展による剰余生産物の生産という客観的条件からだけで，階級社会の発生をみるのは，歴史は人民大衆の自主性をめざす闘争の歴史であり，社会的・歴史的運動は，人民大衆の創造的運動であるという正しい原理を放棄する見解である。

もともと剰余生産物の生産それ自体は，良いことであって，悪いことではない。剰余生産物は人間の生産力の向上の結果である。問題はこの有利な条件を，社会全員のために役立たせることができず，搾取階級を生み出したことなのである。

奴隷制社会は，人間を牛馬のように扱う階級社会であったが，原始社会に比べると，生産力も文化水準も高い社会であった。

古代ギリシャとローマで成立した「奴隷所有者的民主主義」は国家制度の発展を促進し，また彼らの文化遺産は，今日でも尊重されている。しかし，奴隷制社会は，その内的原因によって崩壊せざるを得なかった。

奴隷に対する支配階級の搾取と圧迫は，奴隷の反抗をひき起さざるを得なかった。また奴隷は生産の発展によって，直接利益をうけることがなかったので，生産の発展に何らの関心も持たなくなり，他方，奴隷所有者たちにとっても，奴隷を酷使することが，牛馬を使うよりも別に大きな利益にならなくなってきた。まだ戦争で奴隷を大量に獲得できる条件のあった頃は，奴隷労働も引き合ったが，一旦征服戦争が終り，奴隷の給源が枯渇し，奴隷の買値が騰貴してくると，奴隷制生産は不利になってきた。考えるならば，人間の価値を無視して，動物として取り扱うという制度が，一時的に力を発揮することがあったとしても，この制度が長く存続することは，不可能であったといわなければならない。

こうして奴隷制社会の末期には，奴隷の一部は完全な人身的隷属から解放され，自由な小生産者になったり，またある程度の家庭的生活を認められるようになったのである。

こうして，支配階級の側からも，崩壊に直面した条件に即応して，一部の奴隷主は，奴隷に封建的な小作制に似た搾取制度を適用したのである。こうして奴隷制は農奴制へ移行した。

封建社会の成立により，勤労人民大衆の地位と役割は，奴隷制時代より一歩，高められた。しかし封建社会も，過酷な搾取制度であったことは，周知の通りである。

封建領主は，「百姓は生かさぬように，殺さぬように」，「百姓とごまの油は，しぼればしぼるほどとれる」として，農民の剰余生産物の一切を収奪した。

だが，中世の暗黒な支配下でも，勤労大衆の自主的な要求の発展を抑えることはできなかった。

生産力の発展に伴って，商品貨幣経済が発展し，経済的自立性の比較的強い上層農家や，手工業者，商人などが抬頭してきた。そして文芸復興や宗教改革が起こり，反封建民主主義革命をめざす思想的・文化的基盤が形成された。

とくに封建制社会で，経済的自立性と思想的文化的水準が高かったのは，都市の商工業者たちであった。彼らは，反封建的な大衆運動の指導者として，ブルジョア革命の先頭に立って闘った。しかし彼らは，古い支配階級と妥協し，しばしば立憲君主制を実施し，このためブルジョア社会成立後も，封建遺制は長い間，資本主義社会の発展に影響を与えた。ドイツや日本では，この特徴が強くみられたのである。

封建社会から資本主義社会への移行も，勤労人民大衆の思想意識と文化水準の低さによって規定された。すなわち彼らはまだどのような社会を実現すれば，真に人間が解放されるについての科学的知識をもたなかったのである。

そのうえ，封建社会を打倒する使命をもつ人民大衆のなかでの勢力も数的にすくなかったことも見落してはならないであろう。

たとえば19世紀のフランス革命当時，住民2,600万人のうち2,300万人が農民であり，都市の労働者と手工業者は，わずか200万人ほどであり，ブルジョアジーの方は100万人ほどであった。

マルクスが『資本論』の執筆をはじめた1860年代においても，産業労働者の数は，当時の世界の人口の約1パーセントにすぎなかったのである。

このように，封建社会末期の労働者が数的にすくなく，まだ科学的共産主義思想も普及されていなかった当時，労働者階級が反封建民主主義革命を指導することはできなかったのであり，ましてや社会主義を志向する条件も，主体的客観的に存在しなかったのである。

人間解放を自己の使命として，すべての勤労人民大衆を解放しない限り，自らも解放できないという思想の形成は，労働者階級の卓越した指導者であるマルクスとエンゲルスによって果された。彼らはマルクス主義を創始し，歴史上はじめて，目的意識的に理想の社会を実現する方途を示したのである。

マルクスは「哲学者はさまざまに世界を解釈したが，大切なことは世界を変革することである」と述べ，「万国のプロレタリアート団結せよ」とのスローガンを掲げて，第一インターナショナル（労働者教育教会）を設立し，労働者階級の教育啓蒙に力を尽したのは，マルクスが社会歴史の主体としての人民大衆の役割を重視していたことを示している。

ただしマルクスは，実践家としての彼のこのような考えを，人間中心の社会・歴史観として理論的に確立してはいないのであって，この課題は，すでに述べたように，チュチェ史観によって果されたのである。

マルクス主義の出現により，労働者階級は階級社会（人類の前史）に終止符を打ち，人類の理想社会（人類の本史）を建設するという自己の歴史的使命を自覚した自主的な，歴史の主体としての道を歩み始めた。こうして多くの国で社会主義が実現され，まだ人民が政権を獲得できないでいる国々でも，自覚した勤労人民大衆の声が，支配階級に大きな影響を与えつつある。

1917年のロシアにおける10月社会主義革命の勝利によって，資本主義は，全世界を包括する

単一体制ではなくなった。そして第二次世界大戦は，世界に大きな変化をもたらした。すなわち，アジアやヨーロッパに社会主義国家が出現したこと，植民地体制が全面的に崩壊しはじめる端緒が開始されたこと，およびアメリカ帝国主義が，帝国主義諸国の頂点に立ったことなどがそれである。

アメリカの工業生産力は，第二次世界大戦後，戦前の二倍以上に増大した。戦争直後のアメリカの総生産は，世界の総生産の半分にも達した。また1949年には，アメリカは資本主義世界の金の56.2パーセントにあたる245億6,300万ドルの金を保有していたのである。

第二次世界大戦後，帝国主義の支配方法と略奪方法は，いっそう狡猾となった。

帝国主義者は，社会主義勢力の伸長と，労働運動の高まりに脅威を感じ，新興独立諸国，発展途上諸国の主権を名目的に認め，「援助」を提供する方法で，これらの諸国を政治的・経済的に従属させ，これら諸国の膨大な原料資源を略奪し，これら諸国を自国の商品の販売市場とした。すなわち彼らは「新植民地主義」を遂行したのである。

こうした結果，発展途上諸国の民族産業は打撃をうけ，このため発展途上諸国の人民の生活は，いっそう貧困の度を加えた。

アメリカ帝国主義は，1960年代にはいるや資本の国際化を強めた。第二次世界大戦後の資本主義世界の重要な変化は，「多国籍企業」の出現である。

金正日書記は次のように指摘している。

「アメリカの独占資本は，発達した技術と優勢な経済力によって資本の対外進出を強め，各国に子会社を設置する方法で多国籍企業をつくりだしました。1960年代にはいって，他の発達した資本主義諸国でも多国籍企業が多数出現しました。こうして資本の国際化が急速に推進され，アメリカをはじめ発達した資本主義国の多国籍企業が資本主義世界の経済を牛耳るようになりました。」（「反帝闘争の旗をさらに高く掲げ，社会主義・共産主義の道を力強く前進しよう」1987年9月25日）

先進資本主義諸国は，旧帝国主義時代のように，世界をいくつかの勢力圏に分割するのではなく，相互の市場に多国籍企業を受け入れ，その相互依存を認めることによって，グローバルな市場における多国籍企業の共通の利益を追求し，公然あるいは秘密裏な国際カルテルを結成し，また国際金融機関の支配圏を拡大した。

しかし多国籍企業は，世界的に貧富の差を拡大した。世界銀行によれば，発展途上諸国の債務総額は，1978年には4,000億ドルであったが，1987年末には1兆1千9百億ドルに達している。

1980年代には，世界人口の約14パーセントを占める富裕な国の人口1人当たりの国民所得が，平均して1万1,521ドルであるのに対し，世界人口の約50.1パーセントを占める貧しい国のそれは，平均266ドルにすぎないのである。

しかしこのような事態は先進資本主義諸国にもはね返らざるを得ない。なぜなら発展途上諸

国の経済が衰退し，外債が増大すれば，発展途上諸国の購買力と支払能力が低下するからである。このためヨーロッパの主要な資本主義諸国の失業率は12〜13パーセントに達している。

現代帝国主義が対外的にも対内的にも多くの矛盾を深めていることは明らかである。

しかし帝国主義はおのずから消滅するものではない。革命の前衛部隊である労働者階級の党と，そのまわりに結集し，団結した人民大衆，および党と人民の優れた指導者がいて，はじめて社会革命は成功裏におこなわれる。

原始人群から原始共同社会を経て，奴隷制社会，封建社会，資本主義社会，そして社会主義社会へと発展してきた人類の歩み，社会の発展史は，結局は，人間の自主性と創造性および意識性の発展の歴史であった。

人間の運命，人類の未来に対して，まださまざまな悲観的要素と悲観的見解がみられ，人びとをして不安と危惧にかりたてる現象もすくなからず存在するが，しかし私たちの理想とする社会，すなわち勤労人民大衆が社会の真の主人となり，人間相互の愛情と信頼が無限に深まり，人間の自主性が完全に実現され，発展を続ける社会を，人類は必ずこの地上に実現し，人類の「本史」は開始されるであろう。